甲斐の金山から　平成13年3月31日　第16号

博物館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡／湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館報

7万人目入館者達成

3月25日の午後、めでたく有料入館者7万人目のお客様をお迎えすることができました。

このお客様は、横浜市緑区北八朔町にお住まいの遠山知沙さんで、お母さんと御一緒に入館されたもので、『知人の小山さんから、「楽しい博物館があるから行ってみたら」、と紹介されて来ました。あちこちで記念入館者になった人のことは話には聞いたことがありますが、まさか自分がこういうことに当たるなんて驚いています。』と話されました。

遠山さんには、7万人目入館記念証、博物館展示図録、オリジナルテレカ、花束などの記念品が館長から手渡されました。

開館から3年11か月。教育文化施設として、7万人以上の人に入館していただいたことをありがたく思っています。

これからも初心を忘れず、館の機能が十分発揮され、喜んでもらえる施設づくりを目指しますので、変わらぬ御指導・御協力をお願いします。

金山博物館は下部町の「顔」

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館 館長　**谷　口　一　夫**

当館は、間もなく開館4周年を迎えます。去る3月25日には、有料入館者7万人目を達成しましたが、この数字はなんと下部町民の13倍にもなります。

町の活性化のために有形、無形の役割を果たしてきたことになります。来館者は県内はもとより、静岡県、神奈川県、東京都などが多く、宿泊している旅館、ホテルから勧められて来られる方もたくさんありますが、最初から当館を目的として来られる方も随分多くなってきていますし、ホームページもかなりの数が開かれており、関心を持っている方が大勢いるという手応えを感じます。

今、国民の関心は「本物志向」で、かつ「学習意欲」が満たされるものでありますが、来館者の多くの方が、見学後「随分充実した内容で驚きました」とか、「田舎の、それも温泉街にある博物館なので、もっとチャチな施設かと思っていたら、なんと、驚きました。金山のことが良く分かりました」など、博物館のロビーで来館者と話を交わしながら聞かれる言葉などからは、町のために博物館は役立っているんだなという印象を強くもつことができます。

甲州金

博物館というと、単に「お宝もの」を陳列している場所と思われている方もあるかと思いますが、湯之奥金山博物館では、戦国時代金山、それもそれまでの「砂金」に代わる最初の「山金」（鉱石から金を採る）採掘金山が、なんと、この湯之奥中山金山遺跡（国指定史跡）なんですが、その湯之奥金山の「歴史事実」を映像シアターの210インチの大型画面で見せ、ジオラマ（模型と映像）で展示し、さらに金山で使われた道具（鉱山道具、生活の道具）や、本物の「甲州金」を含む考古資料、特に日本の四進法による貨幣制度は甲斐国から始まり、後に江戸時代の貨幣制度へと移行していきますが、その「本物」の貨幣が展示されていたり、民俗資料、文献資料、全国の著名な金山の金鉱石などの資料展示もあり、歴史を分かりやすく公開しています。当然、希望のある方には館内を解説付きで案内しています。

また、奈良時代から始まった「比重選鉱」法による砂金採り体験学習は人気で、2度目からは、これだけを目的に来館される方も少なくありません。大変満足して帰られています。どういう形であれ、下部町へ来られるお客さんが下部温泉や金山博物館で満足されて笑顔で帰る姿に接することができることはうれしいものです。下部温泉郷や金山博物館は下部町の「顔」でありますから、ここへわざわざ来ていただいた方々が、良い印象をお土産に持って帰っていただきたい、そんな思いを全職員が持っています。

下部温泉に来たお客さんが温泉や博物館で悪い印象を持ったら、それこそ下部町にとってマイナスです。その意味で私たちは常に下部町の「顔」だという意識を持ち続けています。

当館では、以上のような「常設展示」のほかに、公開講座、企画展、特別展、親子映画会、玩具づくり教室、金山遺跡現地見学会などの催しを行い、いろいろな「学習ニーズ」に対応しています。館の刊行物も、「博物館だより」「金山史研究」などがありますが、来館者のニーズはそれぞれ異なりますから、その対応もいろいろです。また、当館には、「博物館友の会」があり、誰でも入会できます。最近は町内の小中学校へ通う「子ども」の入会が目立ちますが大歓迎です。

例えば、下部町の子どもたちが大人になったときに、子どものころ、お母さんに連れていってもらった親子映画会の思い出が心の片隅に一つ残っても、それは博物館の大きな仕事です。博物館というところはそういうところです。これからも「生涯学習」の「場」を提供していきます。

活　動　報　告

1　公開講座

2月17日、第5回公開講座を開催しました。

本年度の5回にわたる講座としての最終回は、「生活の中の金貨－江戸時代の価値に迫る」という演題のもと、千葉大学講師・加藤貴先生にお話ししていただきました。

加藤先生は、江戸の民衆の中で「お金」というものがどのようにとらえられ、どのように流通していたかということを中心に、お話しを進めてくださいました。

例えば、江戸の人々の中で、評判の高い店や品物を書き綴った、「江戸名物評判記」という書物が江戸っ子の間で多く愛読され、またこういった類の書物が次々と出版されていたことは、彼らの江戸に対する誇りが大変大きかったことを窺い知ることが出来、さらにこういったところから生まれてくる華やかな町人文化の中で、「東都花日千両」という書物の中に記されているように、朝は日本橋の魚市などで千両、昼は舞台狂言などの劇場で千両、夜は廓中で千両、合わせて「三千両」という、江戸全体の1日の中で、莫大なお金が流通していたことなどを記す書物などを引用して、江戸の中を巡る大きなお金の動きに合わせて、かつては京都を中心に作られていた文化が次第に東に移り、江戸を中心にして作られるようになっていった経緯や、江戸に生きた人々の、生活に密接にかかわる貨幣やその価値観を、分かりやすくお話しされました。

また、このような多くの商品が流通消費される中で、「富くじ」（現在の宝くじ）が3日に一度の割合で開催されており、富くじの実物を見せたりしながら、今も昔もお金に対する民衆の夢は変わらないということも、改めてお話しされました。

昨年10月から、「我が国の産金と金銀貨／湯之奥金山の産金と貨幣を考える」、という大テーマのなかで各先生方にお話ししていただき、5回にわたり開催してきた公開講座ですが、今回も各方面からの御協力と町内外からの御出席をいただき無事終えることが出来ました。

金山や鉱山だけではなく、比較的に皆が興味を持ちやすい「貨幣」という視点でのシリーズ講座で、新たに知見が広がった部分もあるのではないでしょうか。

これら公開講座は、今後の博物館活動事業の一環の中で、講座集「金山史研究」としての発刊を予定していますので、こちらもどうぞ御利用ください。

2　親子映画会

2月24日の夜間、第4回目の親子映画会を開催しました。第3回目の映画会から少し間があきましたが、50人の参加がありそれぞれに映画を楽しんでくれたようです。

これまで上映終了後には、その都度、映画の内容、開始時間、上映時間、見たい映画などについてのアンケート調査を実施していますが、これを集計した結果、昼間の開催要望が多くあることが分かりました。

このため、初の試みとして、休館日である3月28日の午後、90人の参加を得て、第5回目の親子映画会を開催しました。

今回は、要望が多かった「ドラえもん」、「101」、「ONE PIECE」の3本を上映し、夕刻までの4時間、たっぷり楽しんでいただきましたが、中でも「ONE PIECE」は評判が良かったようです。

このイベントは今後も続けていく予定ですが、映画会の案内は町内小中学校へ配布するチラシとホームページ上でお知らせしています。多くの方の御参加をお待ちしております。

誌上博物館　－シリーズ その13－　～収蔵品紹介①～ 鉱山臼

平成元年から３か年にわたって行われた、湯之奥金山遺跡総合学術調査で出土、発見された遺物・遺品は、挽き臼をはじめとする鉱石粉砕具、生活陶磁器、銭貨、碁石、煙管など多種多様なものでした。

そして、当時の鉱山での作業を伝え、ここで生きた人々の生活の様子を伝え得る代表的な遺物・遺品から、金山博物館の常設展示が成り立っています。

しかし、公開されている資料は発掘資料のごく一部であり、常設展示資料以外のものを皆さんに公開する機会はなかなかありません。

このため、館だよりの「誌上博物館」の欄で、収蔵資料の中で特徴的な資料を、今号から数回に分けて紹介していきます。

最初は、鉱山作業に欠かすことのできない「臼」についてですが、鉱石を粉成すために使用された「鉱山臼」の形態的特徴は、今後の金山遺跡研究の大きな要になり得ます。

調査時、中山金山からは、挽き臼の上臼116点、挽き臼の下臼41点、その他、磨り臼、磨り石、搗き臼、搗き石など全部で189点の鉱山臼が見つかっています。また総合調査は行われていないものの内山金山、茅小屋金山からも何点か確認されており、その後、開館以来行っている主催事業の一つ、遺跡見学会時に確認されたものなど数点が加わり、現在博物館で収蔵保管している臼は200点以上になります。

臼については、これまで「博物館だより」の中で何度か紹介してきましたが、鉱山臼と一口に言っても一様ではありません。場所、砕く対象となる鉱石の質、時代などによって、その形は少しづつ違っています。中山金山という同じ場所から発見された臼でさえも、その形態は様々で上臼については、その形を穀臼型、湯之奥型、黒川型、定形型と４つに大別することが出来ます。

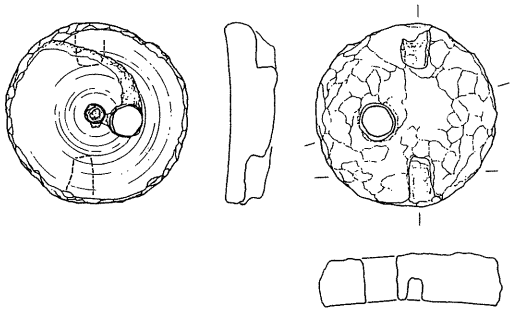
挽き臼は、上臼と下臼を組み合わせ、磨り合わせることによって鉱石を粉砕しますが、上下の臼を固定させるために中心に軸を必要とし、そのため臼には「軸受孔」の痕跡が残っています。中には痕跡だけでなく鉄の芯棒が残っているものも非常に希ではあるのですが、発見されています。（この挽き臼は常設展示にて公開しています）

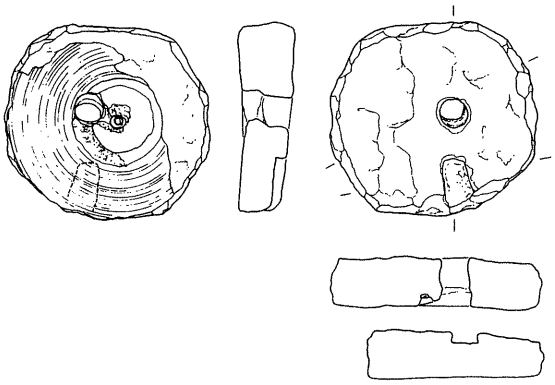
また、上臼表面には「柄」を固定するための柄溝と、鉱石を投入するための「供給孔」が彫られています。柄溝が彫られている数は１～４箇所で一般的ですが、側面に「柄」を挿入するための「柄穴」を設けることもあります。

硬い鉱石を微粉化させるため、挽き臼にはある程度の重量と硬さが要求されますが、基本的には上下臼ともに円盤状で「磨り面」を持ちます。上臼の磨り面には、表面から貫通した供給孔と、鉱石が回転移動した際の「回転痕」、そして鉱石を円滑に送るための「ものくばり溝」が確認できます。下臼の磨り面には回転痕と軸受孔が残ります。

今回は湯之奥型挽き臼を２点紹介します。

（学芸員・小松美鈴）





私の研究ノート⑤

湯之奥金山・富士（麓）金山の金山衆③

高　岡　伸　五（湯之奥金山博物館友の会会員）

湯之奥金山（中山・内山・茅小屋）、富士（麓）金山の金山衆は、これまで述べてきましたように、残された文書の内容、文書の所有などからして駿河国旧富士郡の人たちということが濃厚になってきました。

ではそれらの金山衆がどういう人たちであったのか、その事実が明らかになれば、甲駿国境の両金山の姿や、金山衆の性格や技術など、より深く研究が進められるのではないかと思います。

実は、金山衆が駿河国の人たちという考えは、金山史研究第１集に収録されている、堀内真、堀内亨の両氏の公開講座記録のなかでも触れられています。

問題は、その人たち一人ひとりの「姿」です。その「金山衆」の「姿」に、少しでも近づくことができればと思い、研究ノート④（館だより第15号）では天正２年（1574）に武田家（勝頼）が、旧富士郡14村から49人に発給した、「武田家普請役免許朱印状」をもらった人と金山衆との関係を考えてみたわけですが、推定の域を越えられない部分がたくさんあります。でも、そうした検討も必要だと思います。

今回は、竹川家文書２通から考えてみたいと思います。一つは天正11年（1583）５月３日の徳川家普請役免許朱印状ですが、徳川の役人井出甚之助（正次）から太田伊賀守、竹川藤左衛門、石川佐渡守、それに金山衆22人に宛てた竹川家文書があります。この金山衆22人という点に注目してください。

二つ目の文書は、一つ目の文書から19年後の慶長７年（1602）に書かれた志村甚之助証文ですが、これには掘間が16あり、中山の分として３、富士（麓）分として13、計16人の金山衆が確認できます。（中には同じ人物が二つの掘間を持っているようですが、ここでは掘間の数で考えます。）

単純に見ると、22人いた金山衆が16人と数字的にはこの19年間に６人減少しています。引退した人、他国へ移動した人も考えられます。

金山衆の姿を追い掛けていると、こんなことにまでこだわりたくなります。その目的は金山衆の姿を引き出したいからですが、実はこの間に、その６人減少したことを証明できる出来事がありました。

『富士石川氏史』『宗川寺縁起』（1978）によると、慶長２年（1597）に治山治水に卓越した石川宗川は子息五左衛門尉重永らとともに、本家石川治左衛門尉吉久並びに、一族渡井六右衛門等と富士金山衆を引率して相州瀬谷へ移住、多摩川堤防工事に着手したとあります。

民俗研究者の堀内真さんは、金山史研究第１集75ページでこの伝承を紹介しています。

そして本来は、多摩川上水でなく「二ケ領用水」のことをいっているのではないかと考察しています。このような話があるということは、この時期に富士（麓）の金山衆の何人かが移住した可能性があるということになります。それが22人から16人に減少している姿を伝えているのではないかと思います。

移住の伝承も裏付けられると思われます。

徳川家普請役免許朱印状

於向後城責之時節、寄前ニ・馳参。可勤奉公旨言上之間。郷次・之普請役。如前々一切令免許・者也。仍如件。

天正十一年未発
五月三日　○　井出甚之助（正次）奉之

太田伊賀守
竹川藤左衛門
石川佐渡守
金山二十二人衆

○天正十一年一五八三
○朱印文「福徳」

館からのお知らせ

館だより第15号でお知らせしたとおり、金山史研究第２集を刊行しました。当館売店及び下部農村文化公園で販売しております。

また、郵送扱い（送料310円）もいたしますので、御希望の方は当館まで御連絡ください。

◎書名　金山史研究（第２集）
～平成10年度公開講座の記録～

◎体裁　Ａ４版110ページ

◎定価　1,200円（友の会会員は１割引き）

◎掲載内容

日本の金山の歴史と菱刈金山
九州大学工学研究院・教授　井澤英二

石見銀山遺跡の調査から
島根県大田市教育委員会・主任　遠藤浩巳

甲斐黒川金山と鉱山の考古学
東京大学大学院・教授　今村啓爾

佐渡金山と奉行所
新潟県相川町教育委員会・主任　斉藤本恭

博物館友の会　平成13年度会員募集

「博物館をとおして学習する会」……それが金山博物館友の会です。

共に学び、自らの教養を高めるとともに、利用者の立場から博物館の活動に協力していただきます。会員更新の時期を迎えました。

入会されますと

- 金山博物館常設展示・企画展示を無料で観覧できます。
- 友の会主催行事に参加できます。
- 博物館だより及び各種情報や行事案内が送付されます。
- 博物館発行物が１割引きで購入できます。
- 会員期限は平成13年４月１日から平成14年３月31日までになります。

年会費

・個人会員	大人・大学生	1,000円
	高校生	500円
	小・中学生	300円
・家族会員		2,000円
・特別賛助会員		5,000円

入会方法

博物館窓口でお申し込みになるか、郵便局で所定の郵便振替用紙にてお申し込みください。

郵便振替用紙は博物館まで御請求ください。

入会申込書及び会費が博物館に到着した時点で会員登録いたします。

入会手続きが終了しますと会員証を発行します。

詳細は、金山博物館までお問い合せください。

編集後記

毎日目にする窓からの景色の色。少し前まではなんだか寒々しくさえ感じられましたが、段々と明るい色に変化してきましたが、穏やかに季節の移り変わりを感じることが出来るのも、この時期ですね。

JR 下部温泉駅前のメロディブリッジの曲も春の曲に変わっています。橋の入口、駐車場の入口、駐車場から館までの小路の黄色い「金山博物館」の幟旗が、春ならではの強い風にはためいています。

新年度は、毎年恒例の遺跡見学会、公開講座に加え、企画展・特別展のほか、様々なイベントを予定しています。お知らせはその都度していきますのでお楽しみに。

博物館だより　第16号　平成13年３月31日

発行　甲斐黄金村・湯之奥金山博物館
山梨県西八代郡下部町上之平1787番地先
ＴＥＬ　0556（36）0015
ＦＡＸ　0556（36）0003

博物館ホームページアドレス http://www 2. town. shimobe. yamanashi. jp/kinzan/　博物館Ｅメールアドレス kinzan@town. shimobe. yamanashi. jp